

ふるさと見て歩き

第16回

大宮の戦災



▶大宮尋常高等小学校（御城同窓会『御城の思い出』より転載）

今年も八月十五日がやってきました。終戦から六十一年目を迎えるにあたり、地域の戦災について考えてみましょう。

◇戦争の記憶

アジア・太平洋戦争が終結して六十一年。高齢化が進みつつも、戦争体験者は私達に多くの「語り」を残してくれています。しかし、戦後の急激な経済成長の過程で戦災の傷痕は真つ先に修復され、身近にその痕跡を見ることがほとんどありません。

大宮地域の戦争体験者の方がよくお話しくださるのが、昭和二十（一九四五）年七月二十日の水郡線列車への爆撃です。

水郡線の上り列車が玉川村駅付近で爆撃され、死者七人と大勢の負傷者を出しました。死傷者は大宮駅まで運び、南町公会堂（駅前通り交差点付近）に収

容して手当てをし、遺体は田子内の山で火葬したということです。これに先立つ七月十日には山方宿通りへの爆撃、十七日には日立・勝田の軍需工場を狙った艦砲射撃があり、また八月二日未明には水戸への大規模爆撃というように、一般市民への被害が拡大していく時期に当たっていました。

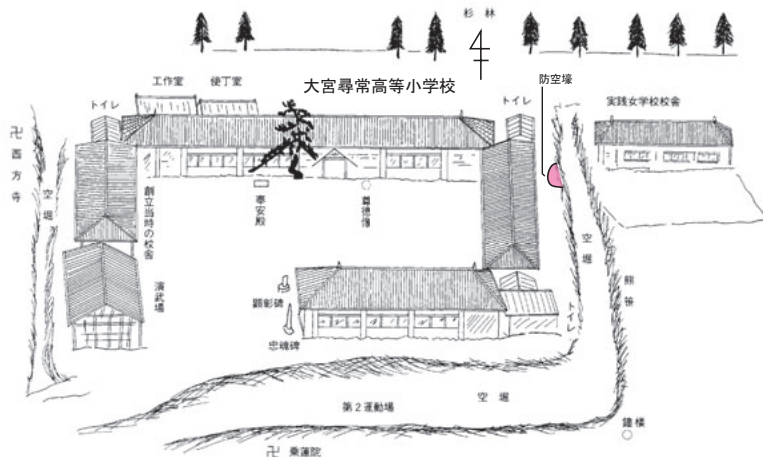
今でこそ大宮地域では戦災遺跡は確認できません。しかし、自宅に防空壕があったことは、まだ多くの方が記憶されています。大宮尋常高等小学校と大宮実践女学校には学童のための防空壕があったようです。

両校の間には部垂城の空堀が通っていましたが、この空堀の北寄りのだんだん浅くなる部分の土手を西側に掘り込んでこの防空壕は作られました。内部は丸太を組んで天井を作った大きめのものだったということです。部垂城の堀は昭和二十六年の大宮町の大火の際、後片付けのゴミを処理する焼却炉が置かれ、その燃え残りを埋め立てたと言われています。このときの燃え残りの量は空堀を埋めただけでは間に合わず、各家庭で屋敷の周りに大量に埋めたそうです。

その後も小学校で敷地の造成が行なわれ、現在は堀跡を確認することはできません。

当時は小学校の一部は護宇部隊（農作業や伐木作業に従事）の兵舎として使われていました。そのため使える教室が限られてしまい、児童は二部に分かれて半日交代で授業を受けることになりました。その上、毎日のように訓練の時間があり、また戦死者の遺骨を駅に出迎えに行ったりでほとんど勉強はできなかったということです。

衛生状態は劣悪で、護宇部隊の兵士



▶大宮尋常高等小学校敷地内配置図。東側空堀の北寄りに防空壕がありました。（大宮町教育委員会『大宮町立実践女学校』をもとに作成）

がシラミのついた服を釜で煮てから洗濯していたことを思い出す、といったことや、布団や風呂を貸すのが苦痛だったというお話も聞かれましたが、彼らの所に行けば高粱米などがもらえたと言ひ、子供心に、怖いけれども気になって仕方のない存在だったのかもかもしれません。

◇資料館の展示資料から

大宮館では、戦時下に着ることが義務付けられた国民服、荷物を入れるための雑嚢、戦地で使われた鉄兜、水筒、巻脚半、軍靴や、徴兵される者に持たせた戦勝守などを展示しています。また、山方館隣の農村漁家高齢者センターでは昭和十九年から始まった「風船爆弾」の五分の一の模型を展示しています。

風船爆弾は和紙をコンニャク糊で何重にも貼り重ねて紙球にしたものに爆弾をつけて放流したもので、紙球部分は直径十メートルにもなる大きなものでした。放流する場所は、当所は北茨城、福島県勿来、千葉県一宮の三カ所でしたが物資の供給が困難となるに伴って北茨城の一カ所のみになり、昭和二十年四月まで作戦は続けられました。

物資不足の時代を反映して衣料や紙などは非常に粗末に作られており、六十年を経過して資料の傷みも問題となっています。資料をお持ちの方は保存方法に十分気をつけていただき、不安な点は歴史民俗資料館（☎（52）1450）にご相談ください。

（歴史民俗資料館）